

## 文化・芸術



「高速道路下」

1961年、油彩・合板  
90・9寸×111・8寸

村上肥出夫 (1933~2018年)

「一見して原色が煌々余りにも壮絶な詩情を響かせており、過去に覚えのない凄惨な画趣に圧倒され、息を飲んだ凝視した」。これは、初代館長・大川栄二が1960年ごろに銀座の兜屋画廊で初めて村上肥出夫の作品を見た折の回想です。

村上は岐阜県に生まれ、幼少期からゴッホに憧れて絵を独学しました。20歳で上京すると、コック見習などの仕事をしながら描き続けました。絵の具の代わりに粘土やれんがのかげら、コールドールや鉄さびなどを用いて描くこともあったとい

います。本年の「名画の扉」はこれが最後となります。本年もご愛読いただき、ありがとうございました。(小此木)

### 《名画の扉》

大川美術館企画展「大川栄二生誕100年記念 コレクターの目」から